

重箱の隅



五木寛之

五木寛之
重箱の隅
イラスト 山藤章二



五木寛之（いつき・ひろゆき）

1932（昭和7）年9月福岡県に生まれる。生後まもなく朝鮮にわたり47年引揚げ。52年早稲田大学露文科に入学、57年まで在籍。業界紙編集者、レコード作詞家、ルポライターなど多くの職業をへて66年「さらばモスクワ愚連隊」で第6回小説現代新人賞、67年「蒼ざめた馬を見よ」で第56回直木賞を受賞。「青年は荒野をめざす」「デラシネの旗」「青春の門」「風に吹かれて」ほか多数の作品がある。

山藤章二（やまふじ・しょうじ）

1937（昭和12）年2月東京に生まれる。60年武蔵野美術大学デザイン科を卒業。ナショナル宣伝研究所に勤務。64年、フリーのイラストレーターとして独立。70年第1回講談社出版文化賞（さしえ部門）を受賞。71年第17回文藝春秋漫画賞を受賞。著書に『イラスト紳士録』『ブラックアングル』などがある。

重箱の隅 じゅうばこ すみ

昭和五十四年五月二十日 第一刷
昭和五十四年八月二十五日 第四刷

定価 七八〇円

著者 五木寛之

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

〒一〇二東京都千代田区紀尾井町三
電話東京（〇三）二六五一一二一一

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

※万一落し印丁の場合はお取替えいたします

装幀 山藤 章二

重箱じゅうばこ
の
隅すみ

重箱の隅・目次

- 1 われらの性春
- 2 スボンの裾から文庫本
- 3 暴力バーと免許証
- 4 人妻と呼ばれて
- 5 消火器の泡の話
- 6 私の好きな女優
- 7 食いもの飲みもの
- 8 京都で嫌われる人
- 9 服に体を合せる
- 10 幻のステーキ小説
- 11 深夜のハスラー
- 12 ゴルフとホモっ気
- 13 外食券食堂の春
- 14 コンニャク今昔譚
- 15 シンヤモの出身地
- 16 舶来上等の感覚
- 17 女が注文するとき

- 18 純白のハンカチ
- 19 車に疲れる日々
- 20 鼻の中の白いもの
- 21 悪魔の耳異聞
- 22 ボーナスの出た日
- 23 田舎の料理屋の話(一)
- 24 " (二)
- 25 " (三)
- 26 評判というもの
- 27 裏ドラ麻雀の秘密(一)
- 28 " (二)
- 29 " (三)
- 30 ヘタクソ麻雀入門
- 31 初夢・ベタ平連
- 32 半吉で迎えた年
- 33 クラシック復興
- 34 セックスの記憶

- 35 日本人の美德
- 36 洒落の理論と実践
- 37 沢開進さんのこと
- 38 耳に残っている言葉
- 39 発音と読みかた
- 40 大人のプロマイド
- 41 三宅一生ショウのこと
- 42 井上陽水さんのこと
- 43 古い街のおそろしさ
- 44 わかれの風景
- 45 キスのような着地
- 46 近くて近きは
- 47 かまわれカモメ
- 48 ブスガリアの美人
- 49 笑うことの難しさ
- 50 ボルノ番組の墮落
- 51 冬枯れのバリで

52 スペインの犬
53 非喫煙者席にて
54 想い違いのスター
55 エッセイ・随筆・雑文
56 偽・酒呑みの自己弁護
57 大島さんの大島
58 正調民謡とタンゴ(一)
59 " (二)
60 " (三)
61 似て非なる発音
62 さわるということ
63 タクシーの中で
64 私の苦手なもの
65 記憶の中の錯覚
66 新聞紙面と人格判断
67 オレは村中で一番……
68 私の喋る言葉

69 金沢版・別れの朝
70 金沢の芸者衆
71 思い出の口惜しい歌
72 運動神経と私
73 日本人はカモじゃない
74 はいってます！
75 Yシャツの革命的幻想
76 日本人の生活様式
77 くたばれ一流品
78 ひねくれ者の発想
79 コンコルドの機首
80 白い肌と黒い肌
81 禁煙に非ず、休煙なり
82 犬のような猫の話
83 眠れぬ夜のために
84 旅行の土産について
85 国際電話の今昔

86 当世犬馬鹿の感想
87 お客さんの思想
88 注意散漫な男の呟き
89 京都のベルエポック
90 当世文士生態模写
91 対談の客あれこれ
92 古き良き喫茶店
93 電話が苦手な理由
94 間が持てない人生
95 野球世代の独り言
96 酒場で好かれる客
97 奇妙なコレクション
98 わがスポーツ前史(一)
99 " (二)
100 雑用を断ち雑用に向かう
あとがき

われらの性春

「五木さんも、赤線に行ったことがありますか」

と、突然、十五、六歳くらいの少年にきかれた。

「ある」

「新宿三丁目でしょう」

「新宿は二丁目」

「あ、そうか、二丁目か」

少年は頭をかいて、

「青線ってのもあったんですね」

「うん」

「なつかしいですか」

「それほどでもない」

「強がりとは言わなくてもいいんです」

「強がりじゃないさ」

私の頭の中に、常磐線の駅が浮ぶ。その国鉄の駅から歩

いて行くと、Yという町がある。遠くに煙突が見えている。

その煙突は、見る場所によって、一本にも、二本にも、三本にも見える。

「きみたちは、ぼくらのことをうらやましがってるのか」

「まあね」

「こっちは慢性的な性的飢餓の状態におかれていたんだ。

情緒をたのしんだり、風流な気分ひたたりする余裕はなかったよ」

「でも——」

と、少年は口惜しそうに頭を振って言う。

「そこへ行って、金さえ出せば公然と相手を選べたんですよ？」

「まあね」

「ほら」

「ほら、つたって、こっちだって年中そんな所に入りびたつてたわけじゃない。なけなしの金を握りしめて、食費をきりつめて、切ない思いで出かけたんだ。きみたちにも女の友達や、トルコ風呂や、いくらでもそれを満たす方面はあるじゃないか」

「ちがうんだなあ」

少年はため息をつく。本気で残念がっている様子だ。

「ちがうって、何が」

「どうせぼくらは、おそく来すぎた世代なんですよ」

「ひがむことはないよ」

「だってそうじゃないですか。五木さんたちの世代は、空襲の晩、防空ごうの中で勤労働員の女学生と抱きあってじっとしてたりした事があるでしょう」

「まさか」

「空にはB29の編隊がサーチライトの光の中に巨大なジョーズみたいに泳いで、サイレンが狂ったように鳴りひびい

て、高射砲の音や爆弾の音がきこえて、明日はどうなるかなんて全然わかんなくて、そして、防空ずきんをかぶった女学生がモンベ姿で腕の中に倒れこんできて——」

「よせよ。小説の読みすぎだぞ」

「それで戦後になったら、アメリカ兵のオンリーに可愛がられたり、パンパ



ン・ガールと友達になったり、そして学生時代には、赤線青線で青春の苦さと甘さを心ゆくまで味わって——」

「よわるなあ」

「腹が立つんです、あなたたちを見てると」

「……………」

「中年になればなったで、女子大なんかと呼ばれたり」

「あれは俺じゃない。野坂」

「こういう目にしばしば合う。だから最近、若ものと喋るのが気が重いのである。」

ズボンの裾から文庫本

キッシンジャーがギックリ腰だという話を人から聞いたことがある。まあ、単なる腰痛なのか、椎間板ヘルニアなのか、一時的なギックリ腰なのか、その辺は確認してないからわからない。

ニクソンも腰痛の持病があるそう。これも本人から聞いた話ではないので、保証はできないが、確かな筋からの情報である。

元南ベトナムのグエン・カオ・キ將軍が椎間板ヘルニアだという話を、こんど外国で聞いてきた。グエン・カオ・キ將軍は昔、バラシューチストだったので、落下傘で地面にドシンドシンと落ちる、そのショックで頸椎の軟骨がつぶれたのだという話。

落下傘部隊の兵士にギックリ腰が多いというのは、初耳

で面白かった。

ある有名な外交官は、学生時代、棒高跳びの選手だったので、高い所から着地するたびにショックが重なり、椎間の軟骨がつぶれてそれが後年ギックリ腰となって現れたという。

どうやら、腰の痛みというやつは、世界的な病氣らしい。私なんぞ多分、麻雀のせいにはない。一時、立ってやる麻雀、立雀リツゾクを提唱したことがあるが、どうも賛同者が少なくて失望したものだ。

麻雀こそ立って卓を囲んだほうがいいと思うのだがいかなものか。

腰が痛い、ついで体を曲げるのがおっくうになる。十円玉なんかがコロコロと転がっても、なんとなく考えてしまう。十円損するのと、腰を曲げることによる肉体的苦痛とをハカリにかけて判断中止の状態におちいるのだ。

腰痛の根本原因は、姿勢が悪いからだと言われたことがあった。

なるほどそれは正論である。私ははなはだ姿勢が悪い。それは認めるが、あまりしゃんと背筋をのばして、原稿を書くというの、ちょっと気が進まない。天下国家を論ずるような仕事ならいいかもしれないが、しょせん小説は女

子供の遊びなのであって、そうしゃちこばって書くものでもなさそうだ。

昔にくらべると、老人で腰の曲った人が少なくなった。むしろ明治生まれの方々のほうが姿勢はいいような気がする。それに比例して腰痛が世界的に増えてきているとすれば、いささか問題だ。

一度マッサージを呼んだら、八十キロはありそうな女がやってきた。腰が痛いというと、背中に乗ってやると言い出した。好奇心の強いほうなので八十キロ乗せたらどんな感じかと背中に乗ってもらった。

ミシミシッと大きな音がして、失神しそうになった。やはり無理らしい。荒療治もほどほどにすべきだと悟って、降りてもらった。

一時、ひどく腰が痛い時に、コルセットがわりにサラシを巻き、ちょうど腰骨のところに岩波文



庫を当てがってズボンをはいて外出したことがある。

喫茶店で編集者と打ち合わせ終って、出てくる途中、レジの前のあたりでズボンの裾口から文庫本が転がり出した。

「なんですか、それは」

「文庫本だ」

「どうして文庫本がズボンの裾から出てくるんです」

あの時は説明に困った。腰が痛いもんだから、と言って、なかなか相手が納得しなくて、実際に腰に当てがって実演して見せて、ようやくわかってもらえた。

地面に落ちているものを拾うのに

ついでにエネルギーを金に換算すると

1円40銭かかるそうだ。

また1円玉を一個作る原価が

1円何十銭とかかっているとか……

要するにいまや、

1円玉一個では1円玉一個も出来ないし

1円玉一個を拾うことも出来ないのだ(?!)

暴力バーと免許証

「外国でバーへ行ったことがありますか」と、K氏が聞く。

「あるよ」

「女がいましたか」

「いた」

「めずらしいですね」

「筑豊から来たという女の人でした」

「えっ？」

「ブラジルで、ヘミカド」というバーへ行ったんだ」

「なんだ、日本人バーか」

「いや、現地の人たちも来る店だよ」

「ミカドねえ」

「大正炭鉱に勤めていた人の娘さんが、ブラジルへ移住して、仕事もうまく行かなくなってヘミカド」に出てたんだ」

「外人のバーへ行ったことは？」

「ある」

「どこで」

「パリで」

「隣に坐るんですか、女が」

「坐る」

「で、どういうことになるんです？」

「シャンペンを飲みたいと言うんだ」

「はあ」

「ビールにしろって言ったら、立って行っちゃった」

「暴力バーは？」

「行ったことがある」

「どこへでも行くんですね」

「小説家だもの」

「便利だなあ、作家ってのは」

暴力バーへ行ったのは、マルセイユの町だった。私の隣で飲んでいた外人の客（あたり前だ）が、勘定のこともめて、ボクサーくずれみたいな男たちに引っぱられてカーテンの陰に消え、五分ほどたったなら、鼻血を出してもどってきた。

「五木さんは？」

「高いこと言ったから、三分の一ぐらいの金おいて——」

「さっさと出てきたんですか？」

「いや、文句を言われた」

「で、どうしました」

「ポケットから日本の免許証を出して見せてやった」

「免許証？ 車のですか」

「そう」

「関係ないでしょう」

「そうなんだ。でも、そしたら、連中おたがいに顔を見合
わせて、OK、OK、ムッシュー、って言ったんだよ」

「……」

「よくわからん話だね」

「こっちがわからないで
すよ。一体、それはどう
いうことですか」

「いや、今もってわから
ない。とにかく、三分の
一だけ払って、メルシー
って出て来た」

「車の免許証ねえ」

「どういことだろう」

「わかりませんね」



私には今もって不思議でならない事件である。私がなぜ

免許証など出して見せたのか。その辺もわれないがらはつき
りしない。たぶん酔ってたんだと思う。

しかし、相手は日本語で書かれた車の免許証を見て、一
体なんだと思ったのだろうか。

「変な話ですねえ」

「そうだよな。自分でも変だと思ってる」

だが、これは事実である。事実は常に小説より奇なるも
のではある。

人妻に呼ばれて

横浜の自宅から、ほとんど毎日のように東京へ通ってくる。

小説家の日常というものは、これで案外と雑事に追われるものなのである。

テレビ・ドラマの中などに出てくる小説家は、最近はどうだか知らないが、以前はほとんどドテラか和服の着流しで、だらしなく帯をひきずりながら書斎に原稿用紙の紙くずの山をせつせと製造している感じの扱いが多かった。

これは多分、坂口安吾とか、或いは戦前の作家のイメージが余りにも強烈すぎたせいにちがいない。

しかし、戦前の文士といえども、やはりマスコミから作られる疑似イメージというやつはあるわけで、いつも和服姿ばかり写真で見ている芥川（龍之介）なども、あれで結

構、マスコミの雑用に追われる事もあったようだ。

改造社だかどこだったか忘れたが、戦前の大きな出版社が、文学全集を出すことになり、その前宣伝のためにほかの売れっ子作家たちと共に駆り出されて地方へPRの講演旅行などに行った折りの葉書の文面を、前に読んだことがあったようにおぼえている。

へ昔も今も、この辺はあんまり変りないもんだなあ

と、その時思ったものだった。ひょっとすると、文学のマーケットが狭かっただけに、昔のほうがかえって文士がジャーナリズムにこき使われる部分が多かったのかもしれない。

話は前にもどるが、まあ、そんな具合で、小説家といっても当節は、いろいろと雑用に追われる日々が続く。

この雑用なるもの、時には奇想天外な要件などもあって、こつちがびっくりすることもある。

先日、ある写真家の奥さんに呼び出された。要件は、御主人のこととお願ひがあるという。お目にかかって話を聞いてみると、要するに亭主と麻雀をやらないでくれ、という不思議な頼みだ。

その御主人は、私の感じでは収支相つぐなう式の麻雀好きで、時には奥さんにコートのひとつも買ってやってるん

じゃないかと思っていた。

「でも、おたくの旦那さんは負けてないですよ。いつもほからがカモになってるんだから」

「また、そんな」

奥さんが真剣な表情で反論するので、私はようやくなるほど、と気がついた。

「五木に負けた」

と、その男は口惜しそうに口走りながら帰ってくると、ゴロリと横になって眠ってしまうらしいのである。

「ちくしょう、明日は負けた分を必ずとり返さなくちゃ」

とかなんとか言って、また出てくる。そしてメチャメチャに勝って帰っては、

「またやられた、五木のやつ！」

これでは奥さんが立腹



するのも無理はない。まるで水道のセンをひねるみたいに、私の懐へ大事なものが流れこんで行ってるみたいな印象で、実はその反対なのだから困ってしまう。したがって、こっちも腹が立つ。

「わかりました。もうおたくの御主人は二度と麻雀に誘いません」

「よろしく」

と、その奥さん、釘をさすような目付きで私を見ると立ち上った。こんな雑用もあるのだから、世の中、大変だ。

消火器の泡の話

酒場で子供の頃の性体験の話をしていたら、一人の女がこんな話をした。和服の似合う落着いた感じの人である。

「女学生の頃の話だけど——」
と、彼女はいった。

「戦争中の話かね」

「なに言ってるのよ。そんな年じゃないわ、失礼ね」

「いいから話を聞きましょう」

「女学生のころ、電車に乗ったの」

「ふん、ふん」

「そしたら凄い満員だったの」

「ははあ」

「なによ、その顔」

「電車の中で触られた話だろ」

「そうじゃないの。ひっかけられた話」

「きみがハントされたのか」

「ちがう、ちがう。最後まで聞いてよ」

「聞きましょう」

「満員電車だったのね。それで降りて、学校へ行ったの。」

「そしたら、教室で気がついたんだけど、スカートに何か白いものがべったりついてるのよね」

「ふーん」

「電車を降りて歩いたでしょう。だから、乾いてゴワゴワになってるけど、なんだか白いものがこびりついてるのよね」

「つまり——」

「そうなの。変態の痴漢が、たぶん電車の中で混んでるのをいいことにあれを——」

「はつきり言いなさい」

「つまり、ザーメンよね。あれをひっかけたわけ」

「よくある話だね」

「そこまではね。で、あたしたち女ばかりの学校だったし、昔は性に関する知識なんてなかったのよね。平凡とかそんな本でちらっと見る位で。だから、全員が集まってきて、このスカートについた白いものは何だろうって首をひねって話し合ったの」